

Dharamsala

異民族双方の「架け橋」とアイキャンプ インド・ダラムサラでの活動で眼科医としての情熱を燃焼

NEPAL

INDIA

日本眼科国際医療協力会議

理事長 藤島 浩
(鶴見大学 教授)

「日本眼科国際医療協力会議 (JICO)」は2009年に発足し、各国で活動をしている9つの眼科団体が所属し、鋭意活動を行なっています。

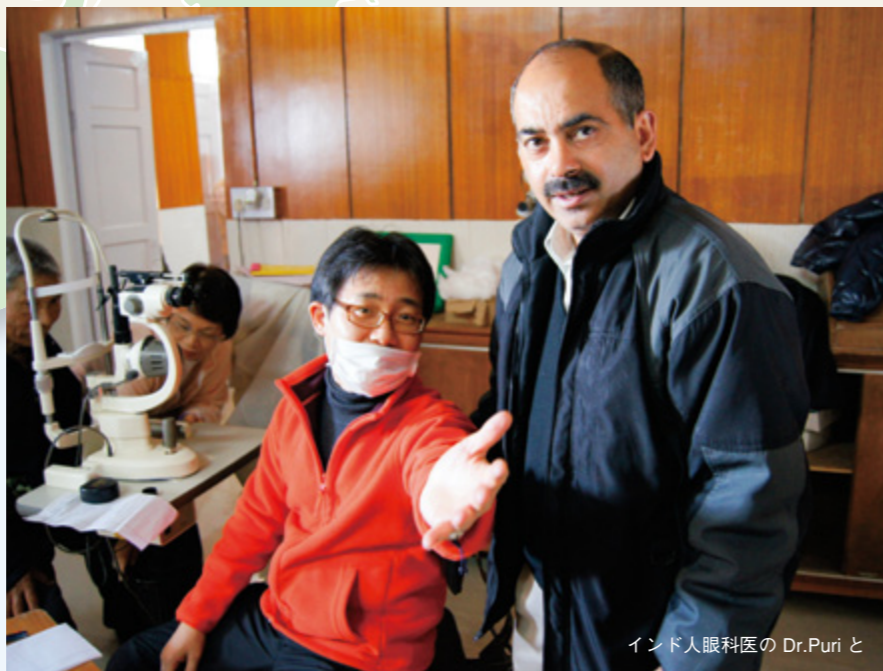
発展途上国では貧困や医療システムの不備により、患者が十分な眼科医療や診察を受けられないケースが数多く存在しております。JICOはこのような国々で、適切な診察、治療機器、手術、そして教育を提供することにより、1人でも多くの方々に視力を回復していただきたいと考えております。

既に、日本眼科医療機器協会の協力のもとに、ホームページ上に中古の医療機器情報を掲載し、現場に供給するシステムが稼働しています。国際協力に理解を示していただける企業や医療法人も増えてきました。また、海外からの眼科医療研修生の受け入れや、国内での実習援助を開始しています。

千寿製薬からは物心両面でご協力を得ており、このたび「銀海」にシリーズで、それらの活動内容をご紹介します。最初は「アジア眼科医療協力会(AOCA)」の活動について紹介してもらいます。



現地施設に点眼薬を寄贈



インド人眼科医の Dr.Puri と

アジア眼科医療協力会(AOCA) 理事 岡田 明
大阪府吹田市・おかだ眼科 院長

アイキャンプとは、医療施設のない地方の町や村にも眼科医療の恩恵を受けてもらうために、ネパールやインドで行なわれている開眼手術活動です。

兵庫県西宮市に本部を置く「アジア眼科医療協力会」(Association for Ophthalmic Cooperation in Asia; AOCA <<http://www.aoca.jp>>)では、インド・ダラムサラで2000年からこれまで12回のアイキャンプを実施し、チベット難民および周辺に住む貧困層インド人の進行白内障患者に手術治療の機会を提供してきました。

インド北西部、ヒマラヤ山麓最西部の斜面に

置する辺境の地にダラムサラという町があります。この地のチベット難民コミュニティにはチベット亡命政府が直轄してきたDelek病院がありますが、そこに眼科医はいません(眼科助手のみが勤務しています)。チベット難民コミュニティに適切な眼科医療を提供するには、理想的にはチベット人の中から眼科医を育成できるとよいのですが、Delek病院の最高医療責任者は「医師になるほど優秀なチベット人は上昇志向が強く、ダラムサラのような辺境の地には居つかない」との見解を示しています。

これまでの活動や調査を通して、チベット難民でも特に難民1世には、言語や文化の違いからインド

人社会に対する障壁を感じ、視力低下を自覚しても地元の州立病院、Zonal病院を受診しない者が多くいることが判明しました。また亡命政府であるが故に、政府間レベルの援助事業が成り立ちにくいことも判明しています。

本来、ダラムサラにおける眼科医療はチベット人や貧困層インド人という民族の違いや個人の経済状況に関係なく、地元のZonal病院で提供されるべきです。したがってチベット難民コミュニティからZonal病院に向かう“患者の流れ”をつくるのが問題解決に繋がると考えています。

AOCAでは、そのチベット人患者の自然な流れを生み出す基盤づくりの一環として、Zonal病院に勤務するインド人眼科医とチベット難民コミュニティ間の交流が親密になるよう、第三者である日本人による眼科医療協力を両者間の「架け橋」と位置づけ、これまでアイキャンプを主体とした活動を行なってきました。

日本からダラムサラまでは片道2日かかります。インドの道路事情も驚愕のスピードで良くなってきてはいますが、往復で4日間も移動に費やされますので、アイキャンプの活動は年末年始の休暇期間を最大限に利用したものとします。

その限られた活動期間で、Zonal病院に勤務する地域唯一のインド人眼科医に診察・手術指導も行なってきました。彼は顕微鏡下での手術経験は皆無でしたが、個人や団

体から寄贈していただいた医療器具、現場での技術指導により、自己閉鎖創を用いた白内障手術を執刀できるレベルに達しました。また、これまでの継続した活動

により、チベット亡命政府が直轄してきたDelek病院のチベット人眼科助手がプライマリ・アイケアを担い、彼の手に負えない患者をインド人眼科医へ紹介し受診させる、人種の壁を越えた連携体制が確立しつつあります。

われわれの最終目標は、日本人眼科医の介入なしに、チベット人とインド人の民族間障壁が薄らぎ、双方の調和的共存が図られ、チベット難民が抵抗感を持たずにZonal病院を受診し、地元のインド人眼科医がその職務を全うすることと考えています。

私は、これまでのアイキャンプ



第12回アイキャンプ隊

活動を通して多くの人と出会い、「仲間」と共にたくさんのことを経験させてもらうことができました。このアイキャンプでの活動が私の「眼科医」として、「医療人」としての“情熱”を高めてくれました。また、この活動を続けるにあたり、これまで勤務していた病院のスタッフ、大学医局の皆さまに多大なるご迷惑をおかけし、ご協力を頂きました。この活動に参加できることに、深く感謝しております。

今年も「第13回アイキャンプ活動」を行なうため、日本を12月27日の午前0時30分に発つ予定です。



間接介助

手術風景
手前より、柏瀬光寿先生(栃木県足利市・柏瀬眼科院長)、藤川正人先生(滋賀県甲賀市・公立甲賀病院)、浅野宏規先生(茨城県行方市・なめがた地域総合病院)、山名正昭先生(滋賀医科大学)



術後回診(指数弁の確認)